

NO FENCE

vol. 37 2015年12月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203

nf-staff@netlive.ne.jp

<http://nofence.jp/>

2015年を終えるに当って

代表 小川 晴久

2015年を終えるに当って、10月~12月の3か月にNO FENCEの主な公開活動を三つ、報告させていただく。10月3日元平壤エリート脱北者招請ヒアリング、12月5日ヨドク15号収容所体験者 鄭光日氏証言集会、12月12日14・18号収容所体験者 金龍氏公開ヒアリングである。(12月5日は共催)

〈管理所は北に於ける一番低劣なもの〉

脱北者S氏は金正恩への世襲が決まった時に韓国に亡命したが、人民保安省など複数の中央部署に勤務した経歴を持つエリートである。彼は18号管理所に勤務したことがある。1999年頃18号(北倉)管理所は7万世帯を擁していた。1999年4月から18号の囚人を7千人ほど咸鏡南道大興の17号管理所に移したと証言した。18号が広く知られてしまったので、2007年から18号を14号の奥の地域に移したという。また18号の政治部長が持っていた文献(金正日の指示)を見せてもらったことがあるが、そこには「連合企業所の党政治委員会は有事の際には移住民(収容所の囚人)を処理(始末)してから作戦に移行せよ」とあったという。

またS氏は、金正日に直訴した党中央の幹部や彼に加担した人やその家族たちが処刑されたケースを語り、連座制(反革命分子は三

代にわたって種を断てという金日成の指示)と管理所があるため、幹部たちが立ち上がれない現実があることを明らかにした。「管理所(強制収容所)の存在が北朝鮮における一番低劣なもの」との彼の指摘が一番心に残った。

〈逮捕礼状には日付が入っていない〉

12月5日の15号体験者鄭光日氏証言集会は、北朝鮮難民救援基金、北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会、鄭光日氏が代表のNO CHAIN北朝鮮政治犯収容所被害者家族会(韓国)の3団体が主催し、NO FENCEは共催団体であった。鄭光日氏単独の証言集会は日本で初めてであり、彼の体験と見聞を詳しく聞くことが出来て有意義であった。ヨドク15号管理所に送られる前の9か月間の取り調べの証言が貴重なものであった。彼は朝鮮平壤貿易会社清津支社長時代の1999年7月、国家保衛部にスパイ容疑で逮捕された。身に覚えがないため否認し続け、取り調べは9か月にわたった。そのうち6か月から7か月間拷問を受けたという。拷問の中でもハト(鳩)拷問が一番苦しかったと言う。両手を後ろ手にして、座れず立ち上がることもできない中腰の高さでラジエーターなどにつながるのだが、その中腰の姿勢のまま、短くて一日、長ければ二日、三日と放置されると、鬱血した胸部がハトのように膨らんでくる、故にハト拷問と称するのだ。その間は水も食事も与えられず、便所にも行けず、その場で垂れ流すのだという。「あいつをハトにしてしまえ!」というのが保衛員の口癖であった。また逮捕礼状には日付が入っていなかった。彼が拷問による虚偽の「自白」にいつ応じる(屈服する)かわからないからである。到頭彼は屈服してしまった。そこで日付が入れられ、裁判もなしに15号管理所に送られたという。

〈トウモロコシを一房盗むと・・・〉

革命化区域の話だ。革命化区域では刑期は何年なのか本人に知らされてはいない。ただ些細な違反、例えばトウモロコシを一房盗むと刑期が一年延ばされるという。二房盗むと懲罰として独房に1か月入れられ、刑期がもう1年延ばされるという。

さてその独房であるが、体験者の証言を基に金属で作られたものが、当日の会場で組み立てられ披露された。立っていられる高さはなく、コンクリートの床に座り続けて身動きを許されない。収容所での独房処罰は1か月が基本であり、臀部が壊死したり脚が曲がっ

てしまい、終了後出されても自力では歩けず担架で運び出されるが、ほどなくして死んでしまう。独房処罰を食らった後に長く生き延びた人は一人もいなかったという。

〈地獄を生き抜く法—それは沈黙〉

NO FENCEは14号と18号を体験したと言う金龍氏を日本に初めて招き（12月12日）、証言をしていただいた。私たちの関心は、彼が1993年8月から95年10月まで約2年間いれられていたという14号での体験であった。それはムジン(無尽)2抗と言う炭坑での石炭堀の日々。1棟に独身者が50名。1日2交代。朝7時半から午後4時か5時まで。そこからまた真夜中まで。お互いに話が出来ない。監視が徹底していた。骨身に知ったのは「沈黙」。言葉を発せず、沈黙することが生き延びる方法であった。隣人に話したことが全て保衛部の役人に密告されてしまうのだ。

作業場は地下720mの六片道の所であった。食事は1食トウモロコシ20粒から30粒。塩漬けした野菜の葉が浮く塩汁。大豆のしぼりかす(おから)を三日に1回間食として与えられた。食事も炭鉱の中ですので一日中陽の光は見られない。ノルマが達成できないと夜10時、11時まで。石炭を掘るのも機械は一切使わせない。鉄の棒で掘らせる（70cm位掘ると火薬をしつらえて爆破。塵肺でゼイゼイ言いながら働く）。

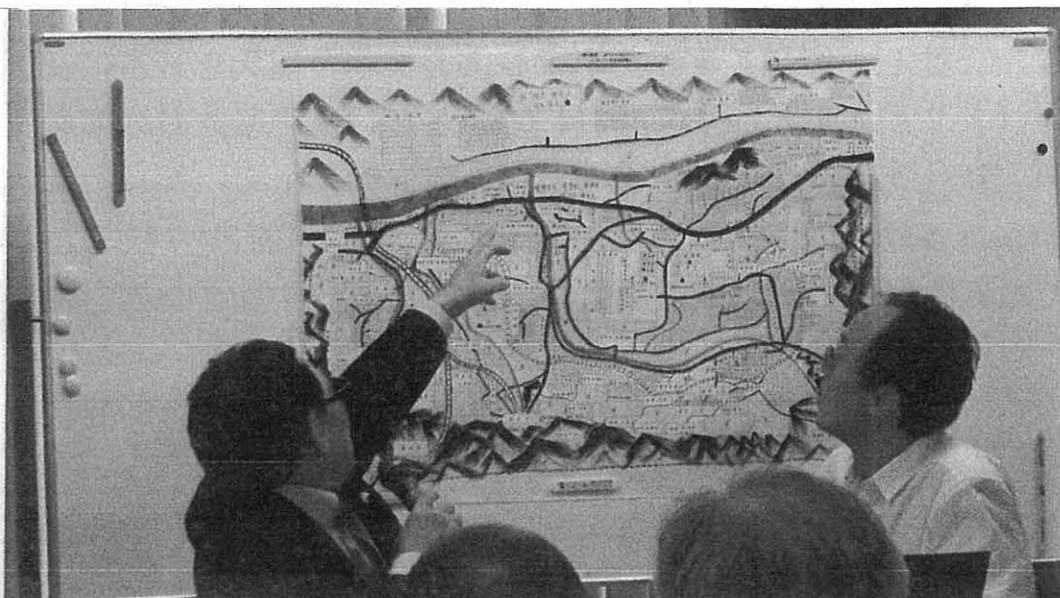
「14号に比べれば18号は天国だった」

2年後に18号に移されると、そこには孤児院で育った彼には見知らぬ母がいて、一緒に生活が出来た。母が道端の草や山の草などを煮て汁を作ってくれ、辛うじて生き延びることが出来た。「母がいなかったら死んでいただろう」という。18号では山に入ることが許された。午後5時までに。14号は一切禁止。栗を拾おうと持ち場から数メートル離れたのを見とがめられて殴打銃殺された事例も証言した。

口が重いこと、かつ人の憎しみを買わないこと、この二つが地獄を生き抜くすべであると彼は語った。**沈黙が地獄を生き抜く法である。**収容所の恐ろしさと彼がそこからの生還者であることを実感させた。

金龍氏公開ヒアリング付記

副代表 宋 允復



主だった収容所体験者を日本に招き聞き取りをしてきた NO FENCE にとって、1999年に韓国入りした金龍氏は長らくミッシングピースとなっていた。2007年から2015年1月まで氏が米ロサンゼルスに居住していたこともあって接触がないまま歳月が過ぎたが、今年9月にソウルで初めてお会いした。

宋が日本に戻る当日、金浦空港に向かう前におよそ2時間話をお聞きしたのだが、

『義理堅く 口重ければ 地獄でも生きる途あり』これが私の座右の銘だ』という氏の言葉が印象に残った。

さて、氏の18号収容所の経験についてはクロスチェックが可能だが、14号での経験についてはそれが難しい。韓国の研究者の幾人かと意見を交わしたが、氏の14号に関する証言の信頼性についてはいずれも判断を留保する慎重なスタンスであった。

しかしながら基礎作業としての聞き取りは欠かせないものであり、先延ばしをしては機会を失うかもしれない。時期的に他のイベントとも重なって専門家諸氏の質疑がかなわず惜しくはあったが、当会としても決断し、ついに初来日の運びとなった。

12月12日の公開ヒアリングに先立って、衛星写真、金ヘスク氏手描きの18号収容所地図等を見ながら聞き取りをしたが、思わぬ話が飛び出した。

「実際に石炭を運ぶトロッコを修理する職場に毎日出勤していた人間の記憶からすると、この地図の炭鉱と鉄路の位置関係は実際とはだいぶずれているな。それはそれとして、実際に18号で長く暮らした人でないと分からないものがいっぱい描き込んである。そうそう、たしかにヨンドウン(永登)のここ(写真の地図ではちょうど金龍氏の手の甲と手首の境に隠れているあたり)に病院がある。地図

だから平面的に描かれているが、ここは斜面で松林があるんだ。そうそう、その松の下にあの女優の、名前は何と言ったか、そうだ、チェ・スンヒ(崔承喜)を埋めたと収容所暮らしが長い先輩が言っておった」

宋はこのひと月ほど前に崔承喜の弟子であった金英順女史に関して民団新聞に寄稿しており(別掲記事参照)、この金龍氏の言及にはハッとした。崔承喜が18号収容所に送られ、そこで命果てたとの証言はこれまでも聞かれたが、その亡骸をどこに埋めたのかについては、宋の知る限り今回の金龍氏の証言が初出だ。もう一点、氏は「猪木と『白髪頭』との試合を平壤で見た」と語った。白髪頭とはリック・フレアーであろうと思われるが、猪木氏がフレアーとの試合を平壤で行ったのは『平和のための平壤国際体育・文化祝典』中の95年4月29日、陵羅島5・1競技場でのそれしか公には知られていない。(ちなみに宋はこの試合を現場で観ており、新日本プロレスのオフィシャルビデオに映っている)

しかし氏は「いや、自分がその試合を見たのは14号収容所に入る前だから93年ごろだ。場所も5・1競技場ではない。万景台テコンドー館だった。観客は2000人ほどだったか。録画や中継ではない。生の試合だ」という。

氏は93年8月から95年10月まで14号収容所にいたとしており、故にこの猪木対白髪頭の試合を観たという、それがいつどこでのことであったのかは氏の14号収容所経験の証言の信頼性に関わるが、95年の『祝典』以前に猪木氏が平壤で試合をしたとの記録はまだ見出されない。氏は「平壤で猪木を自宅に招いて接待した高官が規律違反を理由に粛清された」事例にも言及しており、いずれ猪木氏に直接確認したいと思っている。

<寄稿>「崔承喜の舞 伝えたい」…平壤で指導を受けた金英順さん (2015.11.25 民団新聞)

(関連記事)

今も光放つ「民族の宝」
「脱北」から14年、思い募らす

宋 允復



あふれるような思いを語る金英順さん

「崔承喜をしのぐ舞は韓国にもまだない」。平壤で崔承喜(1911～69年)の指導を直接受けた金英順さん(78)は、「韓国こそが彼女の舞を継承・発展させねばならない」「日本でもしかるべき人たちに伝授したい」と燃える胸の内を語る。よみがえる崔承喜の言葉の数々が今も、自分を突き動かしてやまないと言う。

舞踊家を志す英順さんは1953年、設立間もない平壤総合芸術学校(後の平壤音楽舞踊大学)に応募して20倍の競争を突破、1期生として幼いときから憧れた崔承喜の指導を受ける。卒業後、朝鮮人民軍協奏団に舞踊部専門俳優として入隊、68年に除隊するまで国家行事や金日成主宰の宴席など晴れの舞台にたってきた。

境遇が暗転したのは中国朝鮮族出身の夫が行方不明になった70年(後に、スパイ罪で20年の刑を受けていたことを知る)。家族7人とともに耀徳(ヨドク)収容所に送られ、79年に出所したときに家族は4人になっていた。その後も当局の圧迫は続き、脱北を試みるも果たせず、凍てつく豆満江を渡ったのは2001年1月。韓国に入ったのは03年11月のことだ。

世界各地で収容所体験を証言し、脱北者の実体験をもとに北韓の実情を訴えるミュージカル「ヨドクストーリー」の振り付けを指導するなど慌ただしく過ごすかわら、「芸術の殿堂」や国立劇場で催される韓国舞踊のプログラムを数多く鑑賞した。募ったのは「余生を収容所に囚われた罪なき人々の解放と、独裁の犠牲になって果てた崔承喜先生の舞踊の継承に捧げたい」との思いだ。

「私の舞を体得した後、それを基本に人や動物、海、川、木々、空など自然のすべてから素材を得て、今の時代にふさわしいものを創造して舞いなさい。私と同じことをする必要はない」

そう弟子に語った崔承喜自身、新たな素材を求めてやまなかった。伝統の発掘にも、再創造にも貪欲だった。朝鮮総連系の歌舞団や朝鮮学校の舞踊も崔承喜の流れであり、そのスピーディーな動きを在日同胞の多くも感得したに違いない。

「古きものを新たに、弱きものを強く、失われたものを蘇らせるのが芸術なのだ」「舞踊に水平はあり得ない。強弱、高低、屈曲、瞬時の決め、間で惹きつける」「咲き誇る花のように舞いなさい。芸術は優雅で美しくあらねばならない」

崔承喜の言葉がとめどなく思い起こされる英順さんにとって、伝統墨守に傾く韓国舞踊界のあり方は飽き足らなく映る。

「古きものをただ引き継ぎ反復するだけではいけない。PSYのカンナムスタイルが世界を沸かせたように、崔承喜の舞をリファインし、スタイルのよい現代の女性たちが身につけたなら、世界にとどろく芸術、商品にできる」

「英順」の名は収容所にいた73年に「日本式の名前を捨て朝鮮式に変えよ」との金日成の指示を受けて付けられた「記号」だと語る英順さんは、「親日派のレッテルを貼って民族の宝である崔承喜をないがしろにしてはならない。必ず継承発展させねばならない」と老骨に鞭打つ覚悟だ。



宋允復(北朝鮮人権NGOノーフェンス副代表)

■□

崔承喜(チェ・スンヒ)

15歳で渡日しモダンバレエの踊り手として才能を開花させ17歳で日本デビュー。だが、舞台芸術の基本は韓民族本来の歌舞遺産だった。そこに歩行、手や肩、脚の基本動作を理論化、体系化し、日本の能、琉球、蒙古、中国の舞踊からもインスピレーションを得た。最終的には東洋の思想・哲学に基づく新しい舞踊芸術を創造した。光復後、夫の安漠の求めに応じて平壤に入り、舞踊研究所を開設して後進の育成に努めたが、67年に粛清され、69年に死去。

朝鮮総連前抗議・要請活動への規制に憤慨

12月14日行動に参加して 小川 晴久

新潟から第一次帰国船が出向して56年目の12月14日“モドゥーモイジャ”(みんな集まろう)の川崎栄子さんの呼びかけによる、午後2時からの朝鮮総連前要請・抗議活動に参加しました。川崎さんは事前に麹町警察署に届けを出していました。ところが行ってみると、川崎さん一行は、参加者が数名と言う少なかつたせいもありますが、正門から遠く離れた所に留められ、10人位の制服、私服の警官に取り囲まれ、正門前に行くのは5人、持ち物は全部ここに置いて行け、横断幕も許可しないと言う規制を受けていました。今まで何度も総連前で抗議活動をしてきた私は、この規制の酷さに憤慨しました。今年だったと思いますが、横断幕をもって私は地声で訴えたことがあります。そこで私は彼らに強く抗議をし(15分くらい)、荷物を置かされたのは川崎さんだけで、あとのものは荷物を持ち、横断幕も持って、総連前に行き、抗議・要請活動をしました。総連前に行くと、今までなかったことですが、装甲車の隣に柵で5人ばかりはいれる枠が出来ており、この中でやれというのです。こんな規制は初めてでした。届け出をしたばかりにこの言語同断の規制です。参加者がとても少なかつたので、その檻(オリ)の中でやりましたが、今後はこんな規制を絶対に許してはなりません。川崎さんらが用意した横断幕は堂々としていました。日本語の横断幕一枚。後半はハングルで書かれたもう一枚の横断幕を使いました。ハングルのを見て、びっくりしました。「**金正恩を政治犯収容所へ!**」と書いてあるではありませんか。こういう横断幕は私が見る限り、初めてです。川崎さんに継ぐ、私の訴えの時に、私は守る会の名誉共同代表であり、NO FENCEの代表であると断わった上で、周りにいたハングルの読めない私服や制服の警察官のまえで、「**金正恩を政治犯収容所へ!**」と書かれている横断幕の意味を強調しました。この日の川崎さんたちの行動の意義は北朝鮮に渡った帰国者たちの自由往来の実現のために、総連よ努力せよと言う要請にあったのですが、強制収容所の廃絶にとりくむNO FENCEにとってもと

てもありがたい行動でした。ハングルで書かれたこの横断幕に総連前で出会えたことが。

しかし、この日の最大の教訓は、参加者が少ないと麴町警察署はとんでもない規制をしてくるものだと言うことです。これからは総連前行動が提起されるときには少なくとも50名の参加者が必要です。これだけいれば、こんな規制は阻めます。この日は数人でしたが、規制の4分の3ははねのけました。横断幕を掲げる権利は死守しました。この日の体験を記録し、北朝鮮人権問題に取り組むNGOの皆さんにお伝えしなければと思い、ここに報告致します。